

”上質なときを暮らす“SJRにより

眺めの いい部屋

2018 春夏

No.02

福岡県柳川市「川下町」

「天声人語」こぼれ話(2)
燕雀という名前

栗田 亘

人間は名前を付ける動物である。赤ちゃんが生まれれば、健やかな成長を願って命名するが、一方で開発した兵器にも名前を付ける▼そんな書き出しで「天声人語」を綴ったことがあります。広島に投下された原爆は「リトルボーイ(少年)」、長崎を炎に包んだのを「ファットマン(ふとちよ)」と、米軍は呼びました。ファットマンはリトルボーイに比べると爆弾の寸法が太めでしたから、ふとちよではある。それにしても恐怖のユーモアです▼この話を、インドとパキスタンが核搭載のミサイル開発で競っているというニュースへと続けました。20世紀も終わりに近い1999年4月でした。ミサイルには「アグニ(古代インドの火の神)」とか「シャヒーン(鷲)」といった名前が冠せられました。

「火星」なんかをつぎつぎ打ち上げる現在の北朝鮮を併せて考えると、人間は進歩どころか、ひたすら退歩しているようです▼相撲の醜名(しうな)を話題にしたこともあります。序二段のある力士が「桃太郎」と名を改めました。親方によれば「ウチの部屋には赤鬼、青鬼という力士がいる。ほかの部屋に桃太郎が出て鬼退治されちゃかなわんから、先に付けたんだ」▼そういえば、とボクはストーリーを展開しました。大鵬の全盛時代に、別の部屋の親方が、やはり漢籍から引いて、弟子に「燕雀(えんしやく)」と名付けた。と。大鵬は想像上の大鳥で賢者の例えだが、燕とは小人物のこと。とんだ笑い話である。▼コラムをそんなふうに閉じました。数日後、山形・庄内地方に住む55歳の男性から手紙が届きました。へ私

が燕雀です。あの醜名、好きでした。仰天して、ご本人にお詫びの電話をしました。男性によれば、町工場で働きながら定時制高校に通っていたときスカウトされ入門。178センチ、86キロと典型的なソップ型(痩せ型)でした。幕下三十七枚目で、醜名を本名から燕雀に改めます。「すすくと伸びた人」には、幾度となく逆境を乗り越えねばならない小兵の苦勞はわかるまい」と親方は解説し、本人も気に入ります。しかし芽が出ず、結局廃業。郷里でちゃんこ料理の店を開いている、とのことでした▼ボクは大いに恥じ入り、でも素敵な話だと、数日後「天声人語」に書かせてもらいました。四六時中コラムの材料を探している。それがコラムニストなのです。

くりたわたる ●1940年(昭和15年)東京都生まれ。コラムニスト。『朝日川柳』選者(選者名西木空人)、日本エッセイストクラブ常務理事、日本ナショナルトラスト理事。1965年から2002年まで朝日新聞で働く。勤務地は岐阜支局、北海道報道部、東京社会部、横浜支局など。のち論説委員となり、2001年までの6年近く「天声人語」を担当。2000本近いコラムを書く。著書に『漢文を学ぶ1』『6』『ポケット川柳(童話屋)』、『明日は、どうしてくるのか?』(15歳の寺子屋)シリーズ(講談社)、『リーダーの礼節』(小学館)、『大人のための漢文51』(河出書房新社)ほか多数。

PROFILE こばやし・あきお(左上) ●昭和6年、福岡県生まれ。城南区友丘より入居。趣味のサボテンを通じて世界各国を旅した経験を持つ。こばやし・きょうこ(左下) ●昭和6年、福岡県生まれ。あきおさんの妻で小学校教員を務める。手芸やコーラスなど多彩な趣味を持つ。

やすかわ・まさとし(右上) ●昭和6年、福岡県生まれ。小林さんご夫婦と同じく城南区友丘より入居。銀行に勤め、ゴルフが趣味。現在は体操や散歩が日課。こばやし・きょうこ(右下) ●大正13年、福岡県生まれ。中央区草香江より入居。専業主婦をしており、趣味は音楽鑑賞。

Special interview

Collected data/2017.12.26

小林昭夫さん(86歳)・京子さん(86歳)ご夫婦／安川正俊さん(86歳)・小林キヨ子さん(93歳)「SJR六本松」在住

すぐそこに仲間がいるから、刺激し合って、いきいきとした毎日を過ごせる。

「いつもバカ話ばかりしているよ」と笑い合う4名の間には、知り合って4ヶ月とは思えないほど打ち解けた和やかな空気が流れる。昔、小林昭夫さん・京子さんご夫婦と安川さんは自宅もご近所で、町内会の同じ組という関係だった。だが、何年も連絡を取っておらず、まさか同じところに入居しているとは全く知らなかったそう。偶然昭夫さんと安川さんが廊下で顔を合わせて知ったとか。既に安川さんと知り合いになっていた小林キヨ子さんも加わり、今では顔を合わせれば様々な話をする楽しい仲間だという。そんな4名に日々の暮らしぶりを伺いました。

食事の話や、日々あったことなどで盛り上がる。笑い合う場面も多く、あたたかな時間が流れる。



気持ちのいい場所

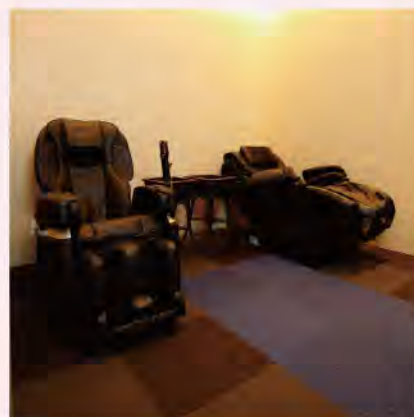
「SJR六本松」



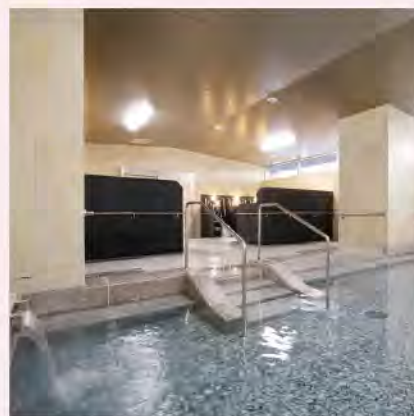
ひとりで、みんなで。
それぞれが楽しめる、寛げる、
心地よい日常がそこにある。



【ダイニング】
「みんなと語り合えるのが嬉しいんだ」と熱く語る安川さん。「窓辺が人気のよね」と、京子さんとキヨ子さんも頷き合う。ガラス張りで動く街の景色を眺められる、明るい皆の憩いの場。



【マッサージルーム】
入浴後、毎日のように通うキヨ子さんお気に入りの場所。「ちょっと強いと感じる時はクッションを置くのよ」と教えてくれた。すでに自分に合った使い方で発見しているようだ。



【大浴場】
安全性を考慮した浅めの湯船には、皆肩を並べて入っているそう。「大きな風呂が嬉しいのよね」と声をそろえる。手すりの設置はもちろん、床は滑らない素材を使用するなど、細部にまで気を遣われている。

新しい街の開発が進む六本松駅のすぐ横に立つ「SJR六本松」。カフェやスーパーが隣接し、同ビル内にクリニックゾーンもある。「とても便利よ」と話す京子さんは、同ビル内にある歯医者に通っているそう。「2階から直接行けるから、雨の日でも関係なく、カフェにもスーパーにも行けるの。たまに食べたものを買いに行くの」とキヨ子さんも口をそろえる。1階に入っているコピー専門店について話す安川さんとキヨ子さんの様子からも、ちよくちよくお出かけしている様子が窺えた。近くには護国神社や大濠公園もあり、散歩好きな安川さんは秋に見た銀杏の話をしてくれた。

活気ある周辺の環境とは対照的に、施設内は静かでラグジュアリーな雰囲気。ロビーには、観光列車のデザインで有名な水戸岡鋭治氏デザインの待合スペースがあり、3階共用スペース廊下の壁紙やダイニングにも水戸岡氏のデザインが用いられている。その優雅な空間が、自然と気持ちを落ち着かせてくれる。ダイニングには個室もあり、「家族が来た時はプライベートな空間で食事ができるのよ」とキヨ子さんが教えてくれた。宿泊可能なゲストルームもあり、ホテルなどを手配しなくても家族が訪ねる事ができるのもありがたい。

Special interview



スタッフの人の気遣いもよく、快適です。これからが楽しみです。

——昭夫

ゆっくりできて本当にいいところ。楽しいですよ。

——京子



小林さんご夫婦の居室には、京子さん手作りの人形が飾られていました。



「この2人はいつも手をつないでいるのよ。見ていて微笑ましいでしょ？周りの人にもいい刺激になるのよ」と話すキヨ子さんは、大正生まれで、入居している方の中でも人生経験豊富な年長者。食事時には、4人掛けのテーブルに5人も6人も集まって、皆で食事をすることもあるのだとか。「人生の先輩でしょ？だからいろんな人がキヨ子さんのところに集まるんだ。僕もその中の一人」と話す安川さんは、社交的で毎日体操の時間には欠かさず顔をだすアクティブ派。SJR内で出来たお友達の情報をもとに近くの神社や周辺を散歩しては、見てきたことを皆に話してくれるのだという。「多くの人と出会えて、とても楽しいよ。みんなここに入って元気になっているよ」と笑顔で話してくれた。

昭夫さんは、入居前は病院にいたという。心臓や膝を悪くする妻・京子さんのこともあり、娘さんの強い勧めでの入居となった。現役の頃は福岡県の農政課に勤め、植物に精通する昭夫さんは、趣味のサボテンを通して世界各国を旅したことがあるそう。自宅にはサボテン栽培用の温室もあり、入居には積極的ではなかった。「初め本当は嫌だったんだ。でも、入ってみたらとても快適だね。スタッフの方の心遣いは素晴らしいし、自宅には時々帰って温室の調子をみたりしているしね。桜祭りや植物園のガイドもやっているんだ」と多方面に忙しい様子だ。

「毎日ごはんの心配をしなくていいでしょ？それが嬉しいわ」とキヨ子さんと頷き合う妻・京子さんは、手芸や人形作り、お茶やお花など多彩な趣味を持つ。現在は休んでいるそうだが、ご夫婦共通の趣味のコーラスをまた始めたい、と歌を披露してくれた。安川さんは現在SJR内でパステルアートのサークルに参加している。「今はまだサークルが少なけれど、これからもっと増えるだろうね」と話す。「コーラスサークルができないかと、僕もこれから楽しみたい」と昭夫さんも楽しそうに話す。

「安川さんはすぐくおしゃれだね、会うたび服が違うの。いっぱい持っているのよ、きつ」と教えてくれるキヨ子さんも、おしゃれな身なり。「ちがうよ、キヨ子さんがそういうから気にしているんだよ」「こうやって言ってくれる人がいるから、ちゃんとしようと思うのだろうね」と笑う安川さん。

日々の生活はそれぞれ。最近は夜更かしになったという安川さんは「朝食の時間が遅くなってしまうと、キヨ子さんに会えないんだ」と少し照れ笑いをする。体操に毎日参加する安川さんに対して、体操には時々参加して、ジムでウォーキングをすることもある昭夫さん。それぞれの生活は変えずとも、知っている顔に時折出会う生活は、心地よい刺激となり、笑顔で会話を交わす日々の姿が目につくようだった。

4人掛けのテーブルにね、6人座るの。そうやって食事をするのが楽しいわね。

——キヨ子

多くの人との出会いがあるから、皆ここに入って、元気になっていますよ。

——正俊



おしゃれを楽しむ様子が窺えるキヨ子さんのブローチ。



安川さんがSJR内のパステルアートサークルで描いた作品。



Shall we go for a walk? —手仕事が見える旅 SJR 高取—

生きているもののエネルギーが
日々を彩り、笑顔を引きだす。



三浦貴子
有料老人ホームSJR高取
生活サポート部 部長
(看護師・介護支援専門員)

みうら・たかこ ● 長年、病院で看護師として勤務。2015年よりSJR高取で部長を務める。看護・介護両方の分野を把握し、幅広い業務に携わる。生花は「草月流」の教室へ通い、30年の経験を持つ。仕事をしながら趣味で華道を続けている。



SJRのエントランスや共用スペースでは、花瓶や生花、形はそれぞれだがよく花を目にする。中でも「SJR高取」のエレベーターホールにある生花はスタツフが生けているというから驚きだ。シンプルながら、上品で落ち着いた佇まいが、見る者の心を落ち着かせてくれる。この花を生けている三浦さんは、流派の中でも比較的自由で前衛的



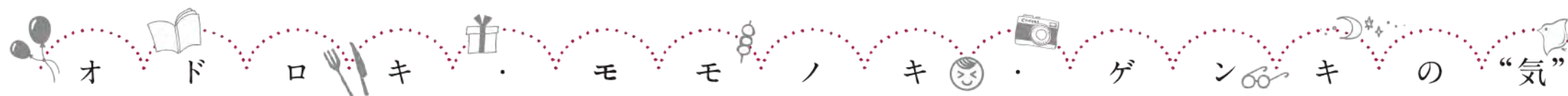
生花に向かう時は一息ついてから。集中し、基本を大切にしつつ直感に従うそう。



敷地内の庭にはさまざまな草花が植えられ、アジサイなどの季節の花も見られる。

な生け方をする「草月流」の華道を30年近く続けている。「花は生きもの。だから、自分に元気がないときはまとまらないし、決まる時はぱつと決まる。綺麗だと感じている時は皆笑顔になるでしょう。生きているもののエネルギーが笑顔を引きだすのだと思う」(三浦部長)。日々の生活をいかに楽しんで過ごしてもらうかを大切にしているからこそ、生花を飾りたいと自ら始めたそう。通勤の道で出会うアカバナサス、敷地内に咲くアジサイや季節の花や緑、身近な草木を使うことも多いのだと言う。

いつもの場所でも視点が変われば新しい発見がある。遠くへ行かずとも、日常の中にそんな気軽で小さな旅をとり入れてみてもいいかもしれない。



News_Topics SJRレポート

Today my new life begins.
—スタッフのハートをひとつに—



入居している方の一日一日を
大切にできる場所でありたい。

北九州門司区。山間の空気が流れる住宅街に立つSJR別院は、平成18年に開業。生活支援の方から介護を必要とする方まで広くサポートし、医療機関と連携しながら信頼に応える介護実績を重ねている。介護施設だからと決まったスケジュールを押しつけることなく、入居される方が「家でしてきた生活が続けていく」という考えのもと、日々の生活は流れている。そのSJR別院で働く磯金さんに仕事への想いを聞いてみました。

笑顔の素敵な磯金さんは、開業当時から働く大ベテラン。結婚を機に門司へ来て、3人のお

子さんを、SJR別院で働きながら出産した。妊娠中の姿を知るご入居者の中には、子どもの

心配をしてくれる方もいて、そういった意味でもSJRはファミリーの一部だとも語る。

「ご入居者の方は、ただ長生きされているわけではない。色々な経験をされてここにいます。私より長く生きている人生の先輩なので、話をしても勉強になります」。それもやりがいの一つだそうです。

磯金さんは朝一番の挨拶を大切にしている。毎朝、自己紹介をして「今日はよろしくお願いします」と声をかける。「ご入居者の中には、私のことを覚えていない方もいらつしやいます。でも、ご入居者のここでの生活一日一日を大切にしたい。だから、毎日新しい気持ちで挨拶をしています」。

この仕事で難しいことは、人と人との関わりだと話す磯金さん。いい顔をして取り繕っても、ばれてしまう。だから、一人一人と向き合うこと。特に、ご入居し



朝の体操の時間。自由参加で、看護師と作業療法士で考えた独自の「よっちょれ体操」は、要支援の方から重度の方まで参加できる内容。他にも、頭の体操など個人のペースで参加できる活動が行われている。

「ここを選んでよかった。そう思ってもらえる仕事をしたい」と話す磯金さん。毎日を大切にしながら、介護の現場で真摯に働く人の姿がそこにあった。

たばかりの方には、今までどんな生活をされていたのか、直接話して相手のことを知るようにしてから付き合っていくのだという。嘘をついたり聞き流したりしない、きちんとした対応の積み重ねが信頼関係を築く。そう語る磯金さん自身も、顔を覚えてくれたり、「この方いつもここにしているのよ」と言われたり：そんなご入居者との関わりの中でやりがいを感じている部分も多いそうです。



磯金由香
介護付有料老人ホーム
SJR別院
生活サポート部
介護サプリーダー
(介護支援専門員)

いそがね・ゆか ● 介護士としてSJR別院開業当時から10年以上務める。スキルだけでなくご入居者の方との信頼関係を大切にしている。

あったか〜い^{はなし}噺②
「九州の大鮎をねらって」

作家 ◆ 夢枕 獏

カミさんの実家が九州の宮崎であつたことから、この三十数年、年に何度となく、九州に通っている。

結婚前からのことであり、カミさんの両親が亡くなつてからも、通う回数がそれほど変化していないのは、本当の目的が釣りだからである。

九州には、鮎の名川が幾つかあつて、カミさんと一緒に実家へおじゃまして、ひと通りの御挨拶をすませた後は、レンタカーを借りて、あつちの川、こつちの川と、竿をかついで飛びまわり、ひとりで温泉に泊まつて、昼は釣り、夜は原稿書きというような日々をすごしていたのである。それが今も続いているというわけなのだ。

宮崎で言えば、大淀川の支流に綾川というのがある、ここによく通い、一ツ瀬川の上流や、北川、熊本の球磨川、川辺川にも足を運び、その時の宿は人吉温泉というのが決まりだった。

宮崎県北部の五ヶ瀬川も大鮎の川として知られており、Fという小屋でオト

リ鮎を買つて、これで野鮎を掛けることになるのだが、この小屋の親父さんに言われたのが、

「尺鮎(三十センチを越える鮎)を掛けてやることはできるけれど、それを取り込めるかどうかは、あんたの腕しだいだね」

という言葉であつた。

あとで、釣り仲間に聞いたら、

「おれも同じことを言われた」

ということであつたから、親父さんの

鉄板ネタの言葉であつたのだろう。

三十年以上通ひ続けて、まだ尺鮎は釣れていない。釣れるまでは通つて、釣れてからだつて、やつぱり九州の川には通うことになるのであろう。

川はきれいで、鮎は大きい。言うことなしなのである。



ゆめまくら・ばく●1951年(昭和26年)神奈川県生まれ。1977年、『カエルの死』でデビュー。1984年に発表した『魔獣狩り 淫楽編』とそれに続くサイコダイバー・シリーズで、伝奇小説の新たな地平を切り開き、ベストセラー作家となる。1989(平成元)年『上弦の月を喰べる獅子』で日本SF大賞を、1998年『神々の山嶺』で柴田錬三郎賞を受賞。2011年から12年にかけて、『大江戸釣客伝』で、泉鏡花文学賞、舟橋聖一文学賞、吉川英治文学賞を受賞する。『キマイラ』『餓狼伝』『陰陽師』『闇狩り師』など多くの人気シリーズのほか、『大江戸恐龍伝』全6巻など長編多数。

表紙／福岡県柳川市の“川下り”。江戸時代の柳川城の堀割を辿りながら、川面に映るしだれ柳の緑を愛で、赤煉瓦の並倉や白なまこ壁を横目に、ときには橋をぐり…。船頭の舟歌と心地よい水音を聞きながら巡ります。

『眺めのいい部屋』 NO.02
2018年3月1日発行

発行・編集 九州旅客鉄道株式会社
JR九州シニアライフサポート株式会社
発行人 橋本親徳
編集・校正協力 株式会社オフィスノベンタ(表2、表4)
デザイン 荒嶽耕平
校 八田彩

写真、イラストデータ協力(敬称略)

表紙 写真／福岡県柳川市「川下り」
3-7 写真／株式会社ジーエー・タップ
文／八田彩
表4 イラスト／田中靖夫

 JR九州シニアライフサポート株式会社

〒813-0041 福岡市東区水谷2-50-1
TEL.092-410-1255 FAX.092-674-3782

SJR

検索